里見八犬傳

第十輯　巻十二上

へ13
709
60

遠門 13
號 709
卷 60

明治三六年十月九日購求

南總里見八犬傳第九輯 卷十二

東都 曲亭主人編次

第百十回 義俠元を瘞く郭號を送る 神靈魔を懲して處女を全る

却説安西出來介は荒磯南弥六共侶ふ當晩館山の城の副門ふ來よけれ城門を遽しくうち敲くもの○ 當城の人々ふのもろ是は安西景次と荒磯南弥六們では之郷高ま忠告の笠前書をのて案内仕て

以ハ事情を知られるべし。稟ちゃうの錯ふとるく寄隊の大將清澄が寝首を捕て來るを快々内へ入れ

素藤

乙やよ頭の殿と呼ふ。それらのよりを。稟ーゆと喚りけ。登時這隊の雑兵們の悪とりを。ーるふ豫面

ーー

五月九日出來介そその餘ハ件の南弥六るべし。両個の外ふ潛び來る。敵ありとも知られざれば則屋内糾ちを疑

づもあらざりけり。因て這隊の頭人ま。與利本膳ふ報知ーて。躯て出來介南弥六を城内へ入れふる有信

程ふ本膳ハ隊兵を領て出て來。即使両個の降人る。安西荒磯ふ對面ーて。その來路を尋ろふ。紛

ありけり。然バ又素藤ハ、御曹司安西出来介が返忠の報あらんよしなれバ、然しも久しからぬにあらねバ、更闌れども
眠らで専ら其の准備を下知して、左右に什麼と問ふ程に、果して子の半を過る時候、出来介南弥六共侶に荒
川清澄が首級を齎して来つ。その由を聞えあげしかバ、素藤は大かたならず歓びて、諸共に実検して、殿台へ推寄せ
ん。先実検を急ぐべしとて、股肱の党羽を召聚合して、各准備の事なれバ、平田張盆作、礪時願八、浅木
碗九郎、奥利狼之介、名幕沙雁太、仙駄麻嘉六に至るまで、皆身甲に軀を固めて、同注所に聚合たる
局の内外ハ、究竟の雑兵三四十名、器械を合て非常に備ふ。用心素より等閑ならず、植列る燭台ハ晃
星の像く照赫亦火て、迯を隈なく明るげる。上坐なる重席の上に錦繍の裀児の可已時なるをうち布て
大将着坐の儲とせり。素藤も立出て、忽ち席に就く程に、奥利本膳盛衡ハ、出来介南弥六と相倶して、
既に同注所の縁頬に来るげるが、相従ふ力士五六名件の降人们が左右に立て、此々と禁めて推縮坐をる。
大家ひとしく見るれバ、降人の沿習にて、腰にハすべ鐵ども帯ることを饒されねども、南弥六が面魂、癖ある
老者とおぼしく、年紀ハ四十許にて、骨逞しく身長卬るり。身にハ仁田山紬の紺と褐と三條ぞ、迭代な涤做

なる縄目形なる夾衣の下にハ兵庫鎌衣の帯布裏なるを被着て、毘舎門捲膊の韓袜ならぬ十王頭の脛衣
着て、煤竹色なる圓桔の襍帯を三重繞らして、鷗尻にぞ締びたる。右手に抱たる秋包ハ清澄の首級なるべし。前
面と倍と見亘して、阿容たる氣色なりけり。又安西出来介も身甲に釬臑有着て、遠山形なる身纏を被たるが
此も亦腰刀ハ入る折本膳に遞與せしなるべし。既にして餘刀を登時蟇田素藤ハ本膳が披露を等まて眼を
睜り聲を被て、返忠の降人安西景次、又一人ハ同志の降人荒磯南弥六と呼ぶなる、彼㒵裹ある若们
我與に安房の滝田に赴きて、里見義実を刺ますくせずに、反て敵に搦捕られ、剝那隊に従ひて我に向ひて
弓を彎たれバ、獅子身中の虫に等しき悖逆の罪饒しがたり。しかれども後悔を先非を悔て、みづから新にせん
為に寄隊の大将荒川兵庫清澄が首級をうちて、帰降の贄にせまく欲する返忠に詭りなくハ、罪戾
宥め功によりて、旧のごとくに徴艱れん。件の首級を齎したると問へバ、出来介頷を傷て、然ハ愚忠を究みかしハ
節書をもて御曹にうちあげられバ、今又其に稟さんハ要なし。相倶したる刎頸の一友人荒磯南弥六が幇助に
よりて清澄が首級を持参せり。いざで実検に備まつらんとて、斎しぬへり。とのに素藤領きて、そのおうち

えぬる事。快なる哉快々と。いひもあへず。南弥六は阿と答て持たる裹を解かけて扨近つかんとせし程に。本膳は遽
止めて。やよ南弥六不敬也。首実検は法式あり。自身の披露を許されねど。そは依洒家に遽与ねばならぬを
南弥六冷笑て。願ふなる事を入るも陪臣なりとも清澄は則国主の名代にて。当所討隊の大将なるを我们
総て両個まで人に知らせず开が首捕て。当城に来らせ捧れば類ひなき大功なるに。人倍に得させまくせんや
鳥許なることをぞ敦囲くと本膳聴ぬ。頭を掉く。礼儀に疎き田野の匹夫。這里にて自由は做しがたり。実
検をぞ遂られて。虚実分明なる上んは。実に大功ともいふべけれ。然れば虚実を知るまでは。誰も小心せざるべからず。そを遮
与さぬは。双首鋏鳥許なりとぞ。ゆりかへしたを。素藤嘿々て声を被て。本膳が遠慮その理あり。然として
他も怕るにやあらん。南弥六なる首級を遮与して共侶に近く扨をはね向ふべしと。その事ありやせん。鏡々と鷹揚に
いはれて南弥六欲然と。応として復疑議せず。裹をとく首級をちら開きて。卒として遮与ものを。本膳は准備の
首函なるを乗して。捧げて扨む後方より南弥六も赤膝を扨めて。素藤に近づくこと。間は七尺に足らざる。沙
雁太麻嘉六推禁めて。あな不覚。且和よ。席を犯すは無礼なりと。制して。介程に素藤は首

函を披せて。熟視て眉を顰めて。いぬる日我戦場にて。清澄と見えしかど。その間遥なるに他の兜を
戴たれば。向を認るに足らざりき。頤八と狼之介は。郷向に侍同せられし時。那陣に在りしかば清澄を見たる
ならん。近く寄て見よかし。といふに果当出高八共侶に扨よりて件の首級を左見右見て。御説ではあれども我们那
里にありし折。清澄が面貌は霽れしは夜分なれば。その後対面せる事なければ。這首と那面影と似るとも似ざれども。
真偽は高ふ上なかり。といへば素藤黙頭て。あらば沙雁太麻嘉六は。いぬる日使价に立て折清澄に対面せしなる
ぞ。好検て真偽を決めよ。と指揮に件の両人も膝を扨めて左右より相ることを約半晌許。言語斉一高宗にかからの致
る日我们殿堂に赴きし折。応対せしは高宗と逆友のを。清澄は上座にありて正しく対面せしにあらねば。他ならぬ欸他なる
らざる欸眼力届かずといふに南弥六焦燥て。噫鈍ましき人々かな。清澄は頭に大なる黒子あり。是皆人の知る
所。其頭に心つかれずやと。のられて。頷く沙雁太麻嘉六。現その黒子は遠外なるか。正可に見ねば見えざれば。素藤
あらしん。其にまつる證据はあれど。そは那里ぞと首函を又も寄まする程しもあらせず。南弥六は膝を扨めて。
黒子は左にとふかつの手。懐に隠し持る短刀を晃りと抜て丁と撃つ。拳尖く。素藤は額を斫られて仰

反て畳拭て殺さんとすれバ。大家斉しく騒噪て。原来檻猿児逃走るぞと叫び群立て。中に沙雁太と麻
嘉六ハ。南弥六が前後より遮隔て組留るを。南弥六透さず振放つ。修煉の剽姚。奴気奮男先に立る沙
雁太が細頸撲地と殺ち落せバ。拄難る麻嘉六も深痍を負て仆れつ。傍に一程に出来介も懐剣を抜
持て倶に杖を。南弥六を資けて素藤を殺さんと競ふ。遮る捏る力士們を当るに儘して殺拂に這那
必死の挣み願八盆作碗九郎本膳父子も度を失ひて。皆素藤を殺させじと扶起して逃迷ふ周章太く
ぞ見れバ。南弥六と出来介ハ。ひとしく機に乗る勢ひ猛く。敵を択まず殺結然しも烈しき大刀風に力士ハヨアく
痍を負て仆るもあり俯もあり。願八盆作碗九郎及本膳も狼も猫も杖子も殺立られて。素藤主僕
方に今殺果さるべうみえたる折から。突然として金屏風の蔭より顕れ出る者あり。是則別人ならず八百比丘尼
妙椿なり。今這事の為体を見るに。驚くけしき気色なく。先結ぶ秘密の印。口に呪文を唱る程に。南弥六信と
を見て殺拂んと振抗る刃ハ千曳の石より重く。手足猛に麻痺れて。瞬騒に紅手毎く。腰肉居に撻と輾
転ぶ。響に驚く出来介も術に中られ度を失ひて。觔斗うち仰反仆れて。速に起も得ざりけり。傍の寄特に賊徒の

兇兵狼之介們に至るまで。皆見て在りしが。機を遅さじとや応と共侶に走り蒐れバ。南弥六出来介身を起さ
んと闘撹けども。女僧の魔術に抑へられて。脚も蟹に異ならず。眼を睜り泡を吐て。遂恨遣るせなかりける。
其中に南弥六ハ。刃を突立て気を励して。立あがらんとせし程に。振閃す兇の白刃の光ハ夕立の雨より繁く
前後より殺る焼刃ハ此世の別れ路。身ハ只醢になるまでに鮮血流る。出来介も。おなじ枕に死てげり。登時願八
盆作ハ。先素藤を扶起して。喚活んとせし程に。妙椿ハ杖をよりて。やよ諸ありける咀嚼金瘡の神薬
あり。一ツ是を用ひバ。気力清やかになるのみならず。痍も亦随て。愈ること速なりとて。懐より一包の丹薬を
出して。且素藤が眉間の痍に塗ちあり。余るをバ口中に推入れて。水を求め渋ぎ下すを。背を徐に拊る程に。素藤忽
地息出て。膝組直して四下を見るに。原来若們悉もあらずして。那剛敵を殺果せし。尼姑よ還り。みのりと向へバ大
家答るもの既に知せもなく。那南弥六が勍勇なる。出来介も亦思ふに倍て刃尖鋭なりしぞ。那御臨見せよ。沙雁
太麻嘉六ハ其ミたる。下兵們も皆辟易して殺されたる者五七名。痍を負ざるも甚多ければ。殆難義に及び一折
料らず尼公の帮助によりて。両個の冤家ハ那像く殺ち捕て。ひとへに素藤眼を睜りて。憎むべし出来介奴が

あんぎ。よそて。因ぞ我と思ひ。寄隊の輿に飽まで我と欺くハ南弥六よりも罪重ク。生拘ふせ思ひの隨ふ恥辱ふ走べき所ふ誅ずるそこ。罰ハ里ふ至てぢりハ今ハ飽迄心地ハ未だ尼姑の邦助ハ人金尼姑ハ亦何もの故ふ昨日遷りのあるぞ。我情婦いのふ。と同へ妙椿合失て然ばとよ。聞へ多日稲村へ赴て内外隈なく覘ひ。大江ガ在ざるを。障るものもなくハ前肖人定て潜び姫の臥房ふ近ふ喚覚ふ。迷ふ。歩ふ。躯て撥撥ふて。長須賀まで来ふ。折那荒磯南弥六ガ其首ふ鳥ふる罪人の首級とりのしてゐるんとふ。撞見首の那奴ガ。咱俯ンとあやまりて。引禁めと角ひ。を巻て仕せふ後方ふ一個の乞児あり。棒りく。咱俯と。駆ふんとせ。近くハ。せ。跌走ふ。登時。咱俯。思ふ。這南弥六を相識ふ。ど。地方ふ名高ふ侠客ふ。我も粗認ふ。今ハ里見ふ従ふ。稲村の城ふ置れ。ある敵ガ。の人。今更。閑て。罪人の首級と。宝竊合ふ。事情ハ。ども。這奴ふ姫と。ふ。後の障ふ。ふ。結果ふ。ふ。

らと。思ふ。戒刀。晃りと。抜て。南弥六ガ。匂ハ。刺んとせ。程ふ。里見ふ。護る。散女鬼ふ。憶ぞ。開奴ふ。妨られて。刺も。果さ。のふ。慨や。姫と。復さ。剰。胸と。蹴られ。脆く。一。妻。時。

堪ぎ。て。ぞ。仆。其里ふ。俯。ぞ。も。我。復。そ。影。躯。千町。上。総路。投。走。程ふ。蹴。られ。胸。最酷。痛。て。堪。ふ。ける。昨夜。通宵。今日。終。心。も。氣。頭。ひ。時。移。日。過。ふ。痦。果。日。暮。開。里。立。今。来。敵。刺。容。個。猛者。奮。駆。突。戰。勢。撓。克。兼。個。南弥六。又。個。奴。ガ。透。秘。術。施。仆。船。方。甲。討。捕。伯。報。素。藤。感。今。ふ。

ふ。雲。時。も。苦。ふ。その。鬼。何。少。世。風。殿。耳。ふ。伏。姫。霊。ば。欲。左。若。

あれ。身。撲。傷。痦。恙。ば。愛。却。今。宵。騒。劇。那。安。西。出。来。奴。ガ。内。応。筆。書。

箇。様。ふ。誘。子。刻。時。候。ば。荒。磯。南弥六。共。侶。荒。川。清。澄。ガ。首。捕。計。

られ。召。入。対。面。ふ。実。撿。折。不。意。駆。れ。我。痛。痍。肩。ふ。懽。兵。尼姑。妙。茶。疼。痛。

立。地。退。心。地。生。平。異。ぞ。上。情。婦。接。攫。来。ば。ぞ。十。分。造。化。

んに合ず復されし八月に雪花に嵐の恨ぞよくそとふへと妙椿ゆゑあぞそも又折のあるべきに朧を得て蜀を臨む情欲は
且聞め今ゆく思ひ合されば曩夜南弥六が長須賀の串明亭にて窃まれし首級は清澄の偽首ならん歟
しそありけめ。然とも思ひけりしかど敵の幇助になるべかりし結果んと欲せしを果さで遂に憾くりしに這里まで終に
討捕せし他が命運尽する明らかなく斬梟けて寄隊に胸を涼さしめ里見父子を討滅して安房上
総もわが手に入らばかん身の隨意なるべく浜路を急ぐるかと慰められて素藤は笑つゝ屡點頭て意見
誠にその理あり。本膳は南弥六と出来介が頭顱を刎て城外へ梟首せよ。寄隊の奴們よしと傍ら見ざる胆を
落さしめ。沙雁太以下の力士們の斃されしは皆屍骸を埋め尚息あるは扶退けて尼姑に乞ふて薬を用ひよ。願ふは
弇作碗九郎狼之介們は其隊々の成りをき悔りて寄隊の陣へ間者として虚実を探りて注進せよ。我
痍浅からねども神薬宣示に即效ありて起居も既に自由なるに先奥へ退りて徐に将息をべきのを天きよ
明ならん。快せよと言語急迫しく吩咐て卒とそやとて身を起せば妙椿は又懐より件の妙薬一包を出て
本膳に遞與しておゆるぞを金瘡児に取するも一匙々々分ち用ひば死を起すものならんとおくろ給ひさる素藤を

扶けて奥へ入る程に本膳その餘の悪党等も言葉を一つに欽びを舒て斉一目従りけり。恁而本膳碗九郎們は
猛可に手下の雑兵を召聚して下知を傳へて金瘡児を退け屍骸を出し遺りの血に塗れる席薦はゆく簀子縁
頻迭も清く洗ひ流せといそがする。閑諍果ての棒きて杓鉄條鎖入て横は迹のまゝなる譙樓の大鼓音
高く六ッ聞こと明かなる。休題卓表這館山の城の囚牢司に海松井軻遇八と喚做せる者あり。南弥六と出来介が
亡骸を奥利本膳より遞與されて梟首の為に獄卒に命じて首を斬らせつゝ城外へ出さして梟並べん
とて準備をせしに南弥六が首級は眼を閉ぎ発れる面色活るが像く。見ず快らざるにその首級猛可に重
くなりて合て揚ぐべくもあらざりしを獄卒驚怪みて左せん右せよと罵りて索もて扭結り杓に掛て抬起さん
とすれども索は断離れ人は轉輾ていよく重くなりしは千曳の石に異ならねば大家呆れなど又て立圍ひけり
徒長視てをり登時軻遇八思ふやう昔の荒磯南弥六なむし安房もその名を呼びて洲崎無垢三が外孫なる
よし世の風聲耳に隠れあらざ那無垢三は神餘の與に逆臣定包を鏖さゝせしに謗て光弘主を犯して誅戮せ
られる當時の風聲を語り傳へて這頭の人も皆知ところなるに今又南弥六も里見の與に頭の殿戕刺せられ

欲せ一事成らぞ矢庭ふ斃され勇者の寃魂終ふ首級を止そ怪る奇特を顕まるん我ふ鞠谷の舊臣
そ已ニシ沼老墓番殿ふ仕へて今ふ至れるのミ素より里見ふ恨ふあるに怪まぞ奇一ふ首級と知りつ忍ヨヌ
勢をのく拾出して強く梟首まるるべ竟ふ裁身を崇を禀ん後是も亦知るべ〳〵然ばとそ明々地ふ
こもぢ疑れて貳ろるのとの況ん然りと況ば是も亦罪ふ死所ふ為べ要まるべ尋思ぞ主
意既ふ決りけれ思ふよりと怪々と獄卒們ふ耳ふ示ふ獄卒們も這年來素藤が恩寡くて政の最苛
ぞ疎まとのミ思ひ〳〵大家異議なく羨引てその指揮ぞ從ひける登時海松茅軒遇八を恭く南弥
六が首級ふ對ひ合掌して肚裏ふ念まるる荒磯太哥本意ぞ況ん遂恨さそと猜一方ふ和
主の首級を梟さぞ悄々地ふ隱一まるせ和主の代ふ射方の一人名幕沙雁太の首をとそ箇樣々ふ
計ふ沙雁太が面影ふ和主よ肖る所あり且年齢も相応一けれ実ふ究竟ふ替偽ぞ忠願ふ成ふの
秘事を人ふ知せば我身を護ぞ罪を為ぞ一ぬ〳〵そと諄返一く祈る程ふ獄卒們も皆共侶ふ跪坐て
齊一拜をけり既ふ一を軒遇八を念ふ果て身を起一る卒試ふ拾ぞとのふる一人黠力ある者逸早く

找よりて首級ふ両ぞ〳〵ふ飛つ天殺身を出して拾抗るふ始ふ似ぞと輕くて凡を採るより易りけるぞ
大家二ぞ訝りてその実あるふ怕れる登時軒遇八を支の奇特の憑一ふ敢防むるるく手南弥六
が首級を隱して後々まで人ふ知ぬ〳〵衢ふ本膳ぞ下知を偽て射方の士卒の斃れる沙雁太が首級を
ぞ既ふ遽與されまぞ悄々地ふ沙雁太が首級を
山陰皆瘞めよとそ〳〵も既ふ遽與されまぞ悄々地ふ沙雁太が首級を
出来介が首級を俱ふ城外へ出遣るふ殿基の方へ距ること五六町ふ一ぞ並樹の松ありその樹の間廣る
地方ふ両箇の首級を竝梟けて獄卒們ふ成り〳〵更ふ又沙雁太們が亡骸を北の郭る山陰ふ埋るふ皆
是ぞ事を子もるるのるれば是を來てる者もあるぞ素藤が恩恵ふ疎る士卒の上ふも怪ることヌる然ば
沙雁太が首級ぞ鮮血ヌ〳〵染着るふ面相の南弥六と聊似る処もありそを人髪の乱髪を顔へ揮
拭ぞ〳〵術よく假装るけれ敵も射方も雁貫首ありと思ひかぐもえざりけり只這一奇事のミる
らぞ異日荒磯南弥六を首級を當城の郭内ふ葬ることを為て義侠遠近ふ称えんぞ墳墓ふ
遂ふ郭の名ふ負て荒磯郭と喚做けりを是後の話人介程ふ這朝殿墓る里見家の屯ふ

怕崇軻遺八槇首級

きのふあんさいできすけ　昨日安西出來介が野鷄を射て捉んとそ可笑前を推乃て出さるゝ今に至て如何の事他の御方の不利を云て
舊好あれが素藤に降參さるゝうんとの衆議の許に及び清澄所頭を敵に出來介が不義を
不義義〻〻皆是推量のみにて思ひ合るよりも寧快館山の城の邊に間諜者を遣はし彼方を
探らせんとそ心利る雜兵に下知して悄々地に遣せ却清澄に
報る可密旨を兼まして館山を投て走る程に城より五六町這方なる松原に斬梟る百二級
敵うち成れば憚りて樹間に潛り近づて熟視れば梟首の者一箇は安西出來介又一箇は御方の
ら走る日素藤が使に立て両個の生口業當と出高を騙畧る名幕沙雁太に彷彿さら怎
かのでさすけ
那出來介は敵に降參せ一ゆあ〻〻と毀れる中とのを清澄うち听て原來安西出來介は拔駈して
毀れ欲然出來賊徒沙雁太が出來介に内應して那城内へ引容れ事發覚れて両個を〻〻撃
殺さるゝあ〻ん〻〻そを左まれ右まれ一人とも御方の首級を當陣近く梟られ〻〻知り圖く
〻〻あ〻〻と成る賊徒と蹴散して首級を奪合るべしと事の准備を急る則田稅逸友に二

百餘名の士卒を授けて那松原へ遣ければ逸友隨即馬を乘そめて推寄せる士卒を找り出て喊と嘯き
駈散す首級を成る獄卒们の驚聯て逃走るを一町餘り趕蒐て开が一人を生拘り両箇の首級を雜
兵に持て殿臺退く程に館山の城兵们の敵なりと知りて毀る果さんとて罵詈げも猛の事を
合期さに左右まる程に迫れる獄卒们が逃て來る寄隊に首級を奪ふ〻〻と報げ〻〻擬
勢の〻〻ふ〻〻〻〻素藤は始より毫も誤ぐ冷笑ひて清澄们が不能る敵の首を捕ゆ〻〻
斬梟られる他们が躬方の首を奪ふを柄と思ふ欲いと烏許と嘲りて心ゆく驕り然が又海
松茸軒愚八を寄隊の為に獄卒一名を俘ゆ〻〻肚裏に思ふ〻〻憶某甲が貪る鬼
宣定に不便の〻〻れども寄隊に首級を奪れり友て我身の幸ひ然でも件の替仕見と敵を知らめ
躬方に知らるゝんと尋思に胸うち豁けて後安くぞ思ひける程に殿基に満呂
復五郎が身の看病に隷られる雜兵の許に清澄道耶其者を召近つけ〻〻と問ふ
雜兵の〻〻〻安西出來介が毀れ〻〻と復五郎も洩さて〻〻枕邊なる小屏風に

掛て卒ーて立すくせーふ憶ぶ屏風を推倒ーて登ー掛りゝ推破りくる屏風の裡ふ書翰あり。その折ふ頭見出ーぞれバ出来介が手迹ぞ。寫送ー申ーまヽとありよ。因て私ふ開封せず。そが侭呈閲仕りぬ。さて又昨日出来介ハ復五郎が病痾を問て晤譚の趣箇様々々侭々ふ説したる憶より。その折復五郎が枕邊ふ建たる小屏風の外面破れてありけれバ出来介悄々地ふ拜どうちへて件の書翰を刺入れて。鈴是よりの外今ゆくふ思ひ合するゆゑのぞよとふ復五郎が告訴のよーを清澄听くてその書を受とりて躬て封皮を折ひらき見るふ荒磯南弥六が義侠のみ又安西出来介ハ郷の稲村へまゐりーが折南弥六ふ相譚れて倶ふ素藤を刺まく欲する計畧ハ箇様々々と偽首の事箇前書のみその崖略を誌着て倘不幸ふして吏成らぞ我们二名執れなバその義を人のまるよーみくて敵ふ降参せーるめりと疑れなん事のそゝハふ一筆ちふ遺まりの異日這書を看る者ありバ禀ーゆとありける。と清澄屡読復ーて感ずるよ大のさるゝぎ躯て高宗ふを托ぬよせてよーと告て談まれバ高宗も亦許りて南弥六出来介義侠なるそ館の洪恩を報せん與ふ敵城ふ入りて戦殺まさるバ鳥首孰ろ免るべぎ然るを一個ハ南弥六なるべ。沙雁

太の首級をうんとハ咱们もおろぬるてーと云その詞いまだ訖らぬ毛田税力助逸友ハ那首二級を奪合なりそや感る敵の雜兵一名を生拘ふーゝ士卒を領て来るかへり来ふけれバ清澄ハその即功を賞て高宗と共侶ふ先その両箇の首級を相るふそが一級ハ出来介なると今ゆゝ疑ふべくもあらぬ又その一級ハ南弥六が首るゝを果して名甘㮈沙雁太なれバ随即件の生口を牽出さーてその義を問ふぶ悪果べくもあらぬれバ。おそるく陳まるゆう既ふ精ーゆふぶく那南弥六ハ戦殺れされど。その首級ふ霊ありて始ハ拾げゐさかりれバ館山の獄吏海松芽軻遇八が密ふ計りて那折南弥六ふ皷れする沙雁太が面影の聊肖なる所あれバ這那首級を入替て梟首の數ふ充ーぬ又南弥六ハ出来介が素ふ藤を皷まくせんと折その為体ハ箇様々々ぞ。墓田ハ最初ふ痍を肩て既ふ危かりけるふ妖僧妙椿が幻術のそ急ふ躬方を幇助ーぬバ両個の猛者ハ武勇を折られ進退猛可ふ自由ならで遂ふ弓勢ふ皷を果されて自界首ふ及びぬひとの思ひ分明なりけれバ逸友高宗ハいへバさらなり清澄連りふ感歎ーて思ふふ偏ぶる南弥六出来介が忠魂義胆侭て見乃祖々々の悪名を雪るふ足るべきなれ就中南弥六なるその霊首級ふ住りて自界首を

の
先れ勇者亮ども那妙椿が幻術に不意と殺されて克うこかりしに是命運の致処歟惜むべきも猶あまり
なの這生口に負ふも足らぬ獄卒ありと呼ばえを誅まるとも何の益あらん意ふその獄吏軒遇八と申しんぬ出家と
怕れて南弥六が首級を隠せり。這方の與ふせしゆるるれど亦悟むべきのふあるべ因て這生口に放ちてかへ
いまさべ。且沙雁太が首級に要あり。ふを家裏に取せんも快のそなれと言示してそが細郷の索を雑兵に
解て脚て追放れ獄卒に恩を稱へて宛鼠の逃るごとく館山を投てかろ程に返されて沙雁太が
首級を城へ齎して奇とふとも妙るべと嗤ふ路傍る沼田の中へ投棄しを猶底深く踏入隠しく
立かろ一折軒遇八が秘密を耳に報ふる間話除敏が介程に清澄に高宗逆友们と南里義南
弥六が来介が忠死のよを館ゆるあげんとて更に又詰茂佳橘に連署の呈書を齎して稲村へ遣せ程に
満呂復五郎重時が出来介南弥六が夏の趣信々と告示せば尚起とそ沙ぎる金瘡見復五郎と共に四
五名の彼们の都て佳橘に倶して稲村へ遣さん。徐に將息せよと命じて各籠轎に乗して看病の
雑仕幾名侍隷て安房へ還りける。夏の差配に是のごとく安西出来介が首級を程遠から忠山院へ

遣しつ。叮嚀に送り奉る。墓表朽せず世に貽りて人その義侠を稱えけり。ある亦後話に是より先に
稲村の城内に荒川兵庫助清澄が殿臺の陣中よりまゐらせる使者安西出来介詰茂佳橘とかへ
遣されける詰朝濱路姫のもとに給事の女房们が敬馬憂して辨よりもなく隈なく尋まろ
アーハ初仆明るりのゆめて往方とまるを照験ゆれば已とそ沙ぎと奥隷の兎當墨を告知せ終ゆいん母
五吾嬬前に申ゆえ上まろ一かへ母君敬馬に歎せゆひて。こちも聞せば義成主に訴申さゆふゆそ義成も亦
敬馬に対て事の仔細を尋ねんとおもひ後堂に来まゐと五吾嬬前に立迎へて閑室に密談あり然而宣の
ゆう濱路が在ゆまりけるに昨宵夜半のゆるけんを淡の間に臥てり侍児毎もそれをまゐ稍暁方に帰りー比
空に臥筆をえ出そうもに誤ゆるるれ往方に絶て知せゆるに。士卒と部して快々渉猟らゆるかと
請もに果ゆうに泣ゆへ義成主も嗟嘆に勝ず眉を顰て宣ゆう這回の椿事も那物怪の所為にそあゆ
ぎゆ然ども淫怪窓の下に旦一ゆせ少女子が夜半に臥房を抜出て那黒へとゆくゆゆ倘果してまゆうん
ま縱追隊を蒐るとも索逢ふとかう思へく命の有無も心のとゆ宣に考れば物怪の出来ふてそとゆ不娯

ゆゑぞ吾嬬前推量ぞかし。さる恨ある理りなれど、奴家が思ふにハまだ浜路ハ大江親兵衛が宿直の折より情由ありけんを、さて遠離ぬりしが暮にて惑ひ出さるゝならん。正しき証拠のなかりしかバ、これにて義成又驚きて、それ亦甚しき証拠のあるぞと問せ給へバ、然ればよ。浜路が在らざるをりしより、往方を索ねし照験なる東西あり。ん欲とて他が書案なる匣などを甲乙となく搭検たりしに、枕邊に置せる鼻紙臺なる紙の間に親兵衛が浜路に贈りし艶書一通ありき。那親兵衛ハ九歳といへども心術大人備て、身長ハ年十五六の少年なれば、優りたれバ生情さへやつかれけん。思ひかけざる事なりと、悄語給ふを義成主ハ聴て歎息しつゝ、それも思ひ合することあり。知られずバ悪まするなし。我も亦この親兵衛が宿直の夜、浜路が臥房の次の間にて他們が艶輪を拾ひ、その折ふし親兵衛ハ其頭に在るを、臥房の方に男女の悄語く聲の聞えしを驚されながらがそ怒を忍び退て獨つく思惟るに、青年毎の惑ひぞ色情によりて生涯を誤るもの世に多かり。就中親兵衛ハ智勇兩なき人に勝れて既に当家に功あり。浜路ハ左もあれ右もあれ只今他們が幸を糾して可惜犬士を喪んハ寔に不便のことにて、後に悔あるべしと思ふこともあらん。快親兵衛を遠離て他們が中を堰あへ

なんど思慮して、艶書をバ封も披かで焼棄て人に知せじ。言を設てその次の日親兵衛に身の暇を取せしに、其後那霊玉を土中より拿出せし折、玉の失せしに疑ひ起りて、原来浜路と親兵衛が不誼淫奔ハ幻ながらも物怪の所為ならずやと思ひ惑ふて決難しに、今又なん身も他們が艶輪を拾ひとりたれバ、浜路が逐電定に由あり。我拾ひしハその夜丈焼棄られバ、又まくもあらねど、今朝又なん身の拾ひ出せしハ那里にありや。そも亦奇しと思はれて、吾嬬前ハ面をあげて、ふたゝびと懐へ手を刺入れて出しつゝ艶輪を義成受合て、斜に見くだ素紙ハ是いかにと訝り見返しつゝ、吾嬬前も胸を誤しつゝ左見右見て現不思議なる哉。今朝懐を索くりし折に見つるは素楮なるばかりに文字の迹なく消耗せしハ、そのや甚なる故ありけん。言疎忽に似て倒に艶よりも似るぞかしとうち陪話ゆへバ、義成主ハ沈吟ずる頭を擡て、俺婦よなん身の疎忽にあらず。我拾ひし那艶輪も亦その艶輪と異ることで、実ハ素楮なりけんを、封も折かで焼棄られば、疑念を解くよしなかりしに、今朝又なん身の手に入りし艶輪ハ文字の消耗て、紙のミ正司に残れるハ、此貞行直元們が召返されし下知状の素楮なりしに相似る妖書なるを稍悟りぬ。なほ親兵衛を遠離し浜路を奪去まく欲せし

素藤が與に計りし那妙椿が幻術をて這回も妖書を逆せしハ濱路ハ只管情慾の爲に方なく親兵衛を
慕ひて狂淫れ出るなりと思せし爲なりけり。是を鈍き事の始より惑されて親兵衛を疑ひしより像賢は知で道
さしも事故なる竟に守りを失ひて濱路を奪略れ給ひし一期の瑕瑾を爭何ハせん悔しきをあやしけりて悄語
なる良将も返ぬなり。是千慮の一失なるが、慾ひハ五嬬前も醒て甲斐なき子ならの闇に嗥音をあらぬ夜の
鶴たぐまく、死脛よりも長き別れに堪難て歎き沈ませしのけり浩る折から其ある小坐席のそこ謀しく人の
散動めく聲せしを義成は竟く聞着給ひて那ハ何ぞと咎りく耳を敧し給ふ程に給事の老女女房們が遽く
來て稟しまう方侭思ひかけなくも東なる内庭の樹砬深き邊より五の姫君の忽然と面を出させ給ひ
ぬと折から其の緑類に單侍の友達が心ともなくなりて驚き疑ひしさに聲を立て朋輩を喚聚合
けく皆共侶に走下りて坐席に迎入まゐらせて却昨夜より死往方の知れざりしさましを問まらせ
ぬる事の顛末を問なまりしに姫上答ふるよう我身ハなき元危難あり昨夜の特は危くありしに神の冥助に
あそ目今還させ給ひぬ是ハなき家と母君に見參して稟上て一霎時なりとも死胸の安からぬ

まけ給ふ状なのよしと思えおはせよと仰によりてまあり得りし。爲に義成主の歡びハいへば五嬬前ハ共安かりとぞ憂ひを
轉せ哀さの涙乾る衣袖の上に歡び涙堰あへず女房們をさへろくてぞ又奇なる事ぞと。對面をすら詳なる事
由ハ知ねども且芽出ぬやと宣ふ程に濱路姫ハ奥隷の老黨醫生侍婢們四五名に冊れて爲る這里に
來まして身の歡びを稟しかバ老黨老女房們も倶に寄なる哉。登時義成主ハ要なき男女を退
去く。濱路姫を身邊近く侍らして席を賜ひて五嬬前と共侶に奇異の女危を尋ねさせ給ふに濱路姫の
宣ふやう。昨宵真夜半時候なりけん奴家ハ熟睡まうりしに母君の御聲して連りに喚せ給ふと覺るとも
身も應せず遽しく身を起して建さる屏風の外面に立出てみれバ一個の女僧あり。思ひかけなきを吐嗟と
叫ぶ程しもあらせず矢庭に奴家を引よせて楚と衛ける布嚢に息さへ塞りて聲も立ずかの左の肱腋に
捉摑て那里より出にけん去向もあらぬそ去る程に既にして一里許來ぬらんと思ふ比路に一個の男あり。撞
見頭に女僧をとめて。遮檢見咎ると喚禁め推捉へんと立よりしを。拳一拳て仆しつる後方ゆも亦人ありて
棒もて女僧を撃まんとせしを。呪文を唱へ觔斗を打も。幷ども倒して毫も誤たず左右に刃を抜持て始に

示仆せ一個の男子の胸前刺んとせ一程ゆゑ婢娟多一個の神女最大ゑ多拘児の背ゆ充ち撫たく忽然と虚空ゆ降り来て女僧と遮留めゆゑ女僧い怕れ面色を斫拂ゑ角ひゆゑ神女ゆ胸を撲地と蹴られて奴家と捐て仆ま伏。登時神女奴家ゲ身邊へ狗児と找めう奴家ゑも果せて翠天ゆ升り去向遥ゆ俱しゆゑ快ゑと宛怪則の像く風ゆ撲れて布囊い鮮けて地上ゆ墜ゆけん苦ゑ共もあらぎ多り来。徒而神女い雲の集る高峯ゆ登ら降立て奴家ゲ為と含り扶掖て品山屋ゆ入りゆゑ内いと洞亮ゆく月の夜女ゆ異ゑ多ゆの折神女の乞顔の正可ゆ拜れゆゑ奈ゆの弥増て向まゑ〜れい惶ゆ跪坐て氣色を伺ひゆゑ神女い翔て妙音を奏て慰めゆゑ濱路よ然のゑ多怕れゆゑ咱俤い那尼の類ゆあゑ過世い和女の親族ゑ八犬士们ゲ母ゑれゆ今宵の厄を過去ゆゑ那悪物を徴心〜ゆ。徒だりゆゑ妄明の醉を醒ゆゑ足ゑるべけれゲ具ゆ告ん听れゆ。抑當國主義成いゆの器其量親ゆ劣らぎ。仁義の良将多ゑ〜く。征せ〜て上總を従へ下總半國ゑ〜ゆ騎ゆるゆゑ。天道い盈ると虧く夷濡一郡館一城の素藤ゲ逆謀い即天の懲戒ゑ。小敵ん

ゑ侮りゑ死後陰を示ゆ在ゆ。あゑとゆく咱身い多比犬江親兵衛仁ゆ課て老侯の厄を拯ひゆゑ猶且素藤们を降伏の功ゆ〜かゲ。又素藤を邦助多邪魔の幻術大ゑ多ゆい義成の明鏡も磨鬼ゆ曇ゆ心惑ひて鈍ゑ犬江親兵衛を疑て遠離されゆ素藤ゑ〜ゲ折を多く。又館山の城ゆ拠りゆ〜ゆ。も火急ゆ攻伐ざるい義成ゲ寛仁大度士卒を思ゆ故ゑれども併素藤ゑ天四訓その時いまゲ至ゑ〜ゆ仁を等て前功を全うさ〜ゆ。天機あゆり。あゑ〜ゆ咱神力ゆて素藤妖樁ゆ〜ゲ。

ゆ〜ん館山の賊徒数を盡て。劒ゆせんゆのかくもあゑ〜ゆ所多ゑを呂那寛の一字を誨て事を忘ゲ。

妖孽子屡起ゆのゑ里見の軍威を落ゑ〜ゑ。缺損ゆゑも死を免れて事竟ゆ大害を至ゑ〜ゲ。

ゑを思ゆゲ。今い禍鬼解除せられて和女の上ゆも安躬泥多く。賊徒い雷相の解ゆゲ〜く。誅伏せんゆ疑ゑ多〜ゆ。

も親兵衛を召返さ〜ゆ誰ゑ亦よく那妖賊ゆ當て克を一舉ゆ妻せん八個の犬士ゆ輕重ゆけん先人ゑゲ。

親兵衛を疑て重く用い。餘の七犬士い招ゲ多ゆ所謂隗より始ゑよ。ゑゆ自然の理ゑゑを悟〜ゲ。ゆ〜ゆ疎〜那素藤い妖尼の邦助ゆゑも小敵ゆ心腹の患ゆあゑ。然ゆ小敵ゲを

征伐ふ。その人を失へバ。如意なるべからず。異日倘百萬の大敵西北ふ起ることありて。海陸共ふ攻寄来バ。房總諸城の戍卒悉皆解體せん。その折ふも八犬士の補助あるふあらずバ。誰か亦よく大敵ふ當りて。那呉の周郎が赤壁ふ克ふ倣ふべき。遮莫今番ハ義成の君を。よくふ惑酔て先非を悔る挑あれバ。咱言を俟ずして。親兵衛を召返さるべし。素藤誅伏あるとも。後車の餘轍を忘るゝことなく。いよく犬士を重く用ひて。才略武藝ふ任して。那百萬の大敵も。怕るゝふ足ざるべし。和女稲村へかへる折。答文なふこの義を。饒くよといと叮寧ふ諭させ給ふ。かの示現ふいよく畏まりて頭を拾げ又伏拜みて。原来おん身ハ伯母君の神靈ふてましませし。今ふよりめで應験寅助ありし御恩ふ侍るかし。那八犬士のまへしも奴家も豫め知り侍り。その中ふ犬江親兵衛ハ六稔の程ふ身長の。いとおとなびて大人備て生年九歳と称すれど。十六七の少年ふ立優るハ甚くも故ぞと。訝り思ひ侍る者も侍らず。その疑ひを解しかねて。好家裏ふ侍りましと。おもひ向ましもそと。神女ハ听く點頭給ひて。その疑ひ理りなり。非常の人ハ異體あり。猶靈木ハ一夜ふ生て一夜ふ巨樹と成るが如し。凡庸ふ異なる処ハ人も亦これふ似たることあり。昔唐山東晋の時。安帝の義熙七年ふ

近世崎闇齋も一男子を生れ下ること兩三年の程ふ身長八尺ふ長大ふなりしのあり大童山文五郎是也事ハ一話一言ふ載て詳ふ獨普の趙末のやうなりし

錫の人の子趙末といひし童男。年八歳一旦身長の伸ること暴ふして八尺ふ垂れり。且その鬚髯も忽然ふ生ぬと。晋書ふ載せしと思惟。宇宙の間往として何等の物か有らざる。况てや異邦ふ趙末あり。今ハ我國ふ大江仁あり。世の人視聽ふ廣からねバ。その奇なるを必ずとして疑ふのみ。惑ひを解くべし。今ハしも是までぞ。二親のさぞ安からむふ。快く稲村へ還りねとぞ。送りて出岫より出しみへバ。己が前の狗児が絶て。ちと奴家を背ふらち乗せて雲を起し。宙を走りて駛こと宛駿馬の像く。這大城へ来ぬる程ふ。奴家ハ騎ふ堪ずして。憶ず狗児の背より滾びて大地へ怨然と隊されて。庭の樹間ふ在り。夢かと思へバ。臥房ふあらず。現かと思へバ覚ずしてかへり來されり。然而ありべきふしもあらざれバ。躬て樹蔭を出し。折侍婢毎の見出して。安否を問ふ。我も怪む胸へもつかねバ侍れど。そを知食より。はりもなき物と思ふをもなほ罪ふと重ねをも。何ハせん。饒させ。その人々と陪話なへバ。義成主いよく慚愧て奇也ゞゝと稱ふ。心ハ。おもふ吾孺前も奇しく愛く。歎しみの神の冥助の辱くて感涙の外なかりしを。側聞ぬ老黨老女ハ頭を抬げ目を注して。世ふ有がたき伏姫の靈驗威德灼然なる奇特ふ心耳を洗れて。疑ふべくもあらざれバ。憶ず倶ふ感嘆の聲耳もひとしく。尊くいと恐しくぞ思ひける

南總里見八犬傳第九輯卷之十二分卷之上終